



闘う労働者は美しい

「労働者」という言葉には何か意図的に悲壮感が埋め込まれて伝えられていると思うのは私だけでしょうか。

どちらを向いてもブラック企業、ハラスメントが横行し、正社員と同じ仕事をしているのに待遇が大きく違う非正規労働者、統計不正でやっぱり賃金は上がっていません。肩を落として暗い顔になる状況であることは間違いありません。

しかし、私たちは主要メディアでは大きく報じられないけれど、社会的に大きな影響を与えている闘いがたくさんあることを知っています。その仲間たちの顔は、活気と自信に満ち溢れ、凛としていることも知っています。三池闘争、労大闘争、鉄建公団訴訟、めぐみ薬局闘争などなど、最終しても資本と闘う仲間たちには今もなおグ

ッと引き寄せられるものがあります。

現在、労働契約法20条裁判を高松高裁で闘うえひめユニオン井関分会の仲間は、この『月刊まなぶ』を使ってまなぶ読書会を毎月行っています。藤田委員長は、井関分会の仲間が成長しているのは、裁判闘争はもちろんだが、根底に読書会での「会う、話す、知る」があるからだ。と、裁判後の報告集会で集まった仲間の前で報告されました。実際に彼らの討論は、資本の攻撃に抗し、社会を変えようとする迫力があります。そして顔はまっすぐに前を向き、私たちに連帯し共に闘う力を与えてくれます。

労働者としての美しさは、小さな学習会と社会変革の使命を帯びた闘争にあることを教えてください。

労働大学企画編集委員 吉田 英和